

エクアドルでの小学校教育

横山 かおり

昨年、ある日の天声人語で協力隊が紹介されていました。その中に、人類学者、中根千枝さんが出した本の中の、「がんばりすぎると、落胆や不満も大きくなる」という一節が出ていました。私たち、現職教員の多くがこの言葉に納得してしまうのではないのでしょうか。さらに、「厳しい環境の下では、学歴や職業と関係なく、全人格的能力がおのずと現れる」とあり、まさにこのことが私の1年9ヶ月の活動の中で試されたことでもありました。

私が任地についた日は8月30日。ホームステイ先の家族に連れられて学校を見に行きました。学校はまだ、夏休み中で、玄関の脇の教室では住み込みの用務員さんがじゃがいもを干していました。本当にここで2週間後、授業が行われるのだろうか、というような散らかりようで、静かな衝撃が走りました。村に初めて入ったときもそうでした。村の光景を目にしたとき、どこか寂しい気持ちがありました。私は、この村で好きになるものは何かないかと一生懸命に探したことを今でもよく覚えています。

第一印象はとても大事だと思います。私は、一度抱いてしまったこの寂しい気持ちと以後、戦っていかねばなりませんでした。

最初の職員会議は、給食を食べながら行われました。まず、今年1年どんな行事をするか、の確認でした。もちろん、スペイン語で、ナチュラルスピードで、私がまだ、言葉になっていないという認識は先生方の中にまったくありませんでした。行事の名称は初めてのものばかりで、なかなかイメージがわいてきませんでした。そして、次に担当が決められていきました。私の担当は、ヒデヨ・ノグチの誕生日に何かをやる、集会で音楽発表会をする、ことを必死に聞き取りました。でも、集会がいつ行われるのかはわかりませんでした。職員会議が終わると先生方は、わたしに声をかけることなく自分の教室に戻っていきました。

学校から要請があってから隊員が派遣されるまで、1年以上かかってしまうこともあり、その間に学校の事情が変わり、任地に到着したらすでに仕事がなかった、仕事の内容が要請内容と違って、などということもあります。同僚の先生方のどこか冷たい雰囲気一抹の不安を抱えながらも、仕事があってよかった、などと思ったことでした。

このあたりは、昨年春に行われた中南米地区の調整員会議で話し合われ、要請から派遣までの期間が短くなっていくだろうということでした。

さて、お手元の資料の1にあるように、ヒデヨ・ノグチ小学校は300人の中規模校ですが、1クラスの人数が50人前後のマンモスクラスでした。45分の中で、一人一人の子供が十分に学習活動を行えるような授業の組み立てをするのは至難の業でした。しかも、私は、音楽を8クラス、16時間、体育を8クラス、8時間受け持っていましたので、学年に応じたカリキュラムを立てなければなりませんでした。

さらに、このマンモスクラスの中に、肢体不自由児や、脳性まひの子供がいますから、体

育では安全と障害児への配慮もしなくてはなりませんでした。

校庭はバスケットコート1つ分のコンクリートの中庭で、この中では大勢の子供の運動量が十分に確保出来ないと思い、ジョギングや陸上運動のときは、外にでて行っていました。ところが、外に出ると近くの店へ駄菓子を買いに行ったり、どこかへ消えてしまう子供がいたり、さらに苦労が増えました。それでも、なんとか続けていましたが、ある日、子供とジョギングをしていた私は、犬に襲われて噛まれてしまいました。野良犬だったので狂犬病の注射を5本打つ羽目になりました。でも、子供が噛まれなくて良かったと思いました。

エクアドルには野良犬が多くて、犬に噛まれた隊員が結構いるのです。

資料2に時程がのっています。日本と同じ45分授業です。ただし、4時間目だけが30分です。けれども、給食の朝食時間が延びて多くが消滅していました。国立の小学校では、豆やキヌアと呼ばれる穀物、お米、そして飲み物による給食がありました。多くの子どもが朝食はもちろん、普段も十分に食事をとっていないので栄養状態が悪く、国から給食の食材の一部が支給されていました。

校全体が時間にルーズで、定刻に子供が集まったことはありません。少しでも、子供たちに活動時間を確保しようと活動案を工夫しても、それを実行できませんでした。時間が守られるのは、下校時刻だけでした。12:30にチャイムが鳴ると、たとえやっていることが途中で、教室を出て行ってしまいます。スクールバスの出る時間もあるので、こちらも授業時間を延ばすわけにはいかず、予定したことを消化できずに終わってしまうことがほとんどでした。

こんなことが毎日続くので、日に日にいやになっていくのですが、このいやになる気持ちと毎日戦っていかねばなりませんでした。最初に述べた「人格」が日々試されていたわけです。

資料3は日課表です。週24時間の授業を受け持っていました。授業と授業の間に休み時間が入っていないので、教具の準備は結構大変でした。子供たちもよく手伝ってくれました。最初、時間節約のためにその日に使う教材を予め出しておきましたが、気がつくとなくなっているのが驚きました。用務員さんから、使うときに出さないと誰かが持っていってしまう、という話を聞きました。日本から持ってきた文房具や縄跳びの縄などがなくなりました。日本製は質もよく人気もありました。すべてに番号をふり、使い終わると数を確認しなければならないのがとてもいやでした。

なくなったことを、校長先生に言うと、用務員さんの子供がとった、と用務員さんに文句を言いに行くので私は困りました。用務員さんから「ものがなくなるとみんな、私の家族が犯人扱いされる」という話を聞いていました。私は、以後、物がなくならないように気をつけました。

ヒデヨ・ノグチ小学校では清掃指導はしません。清掃は用務員さんの仕事、ということになっていました。私の任地は乾燥していて、風が強いところなので、毎日埃との戦いでした。普通教室の窓にはほとんどガラスが入っていませんでした。一度割れてしまうと、新しいガラスを入れる余裕がないからです。ですから、どの教室も埃だらけでした。音楽室は窓ガラ

スが割れていなかったけれども、それでも、子供が使う椅子や机はいつも埃をかぶっているので、私は始業前にそれらを拭いていました。ある日、校長先生が、私が音楽室を掃除しているのを見て、とんできました。「それは、かおりの仕事ではない、すぐにセニョーラ・ニエベス（用務員）を呼んでくるから」と言って戻って行きました。セニョーラ・ニエベスは、自分の仕事をやめてすぐに雑巾を片手にやってきました。始業前に用務員さんが一人で学校全部の雑巾がけをするのは無理ですし、担当が指導をして子供を使って自分たちの机をふけば用務員さんはもっとほかの仕事ができるのです。私がお話をすると、用務員さんも同感で、「学校も自分のものは自分で掃除をするという教育しなければならない」といっていました。でも、先生方は絶対に掃除をしませんでした。先生自身がこぼした給食のスープさえ、用務員さんと呼んでふかせているのでした。この妙な役割分担がエクアドルのやり方なのだというのでした。

私が、校庭に落ちているごみを子供に拾いなさい、と言ったときも、子どもは絶対に拾いませんでした。ごみ拾いは用務員さんの仕事だもの、と言われたときは、驚きました。一度、このことを、校長先生に話しましたが、かおりは余計なことは言うな、と言われました。

私は任地に来てから教育に関することだけでも、多くの衝撃に遭遇してきました。この衝撃に対する正直な気持ちを何とかしたいと思いました。けれども、この校長先生の考え方と、自分の短い任期を考えて、音楽と体育の授業をしっかりとやることに専念したほうが良いと思いました。生徒指導上問題があったり、先生方の用務員さんに対する態度が目にも余るものであったりしても、見ないふりをしました。用務員さんにはこのことを了承してもらいましたし、かおりの考えは賢明だとも言われました。この用務員さんは私のよい相談相手、グチを聞いてくれるたった一人の同僚でした。

私が時間割を作るときに校長先生にアドバイスを受けました。それは、体育は朝早いうちが良いということでした。その理由はまもなくわかりました。私の任地は赤道直下、標高 2200メートルのところにありました。標高のおかげで朝夕は涼しいのですが、日中の太陽は強烈でした。暑さで子供たちはすぐにばててしまいます。

マット運動をしたときでした。ビニールで覆われたマットは、太陽の熱でみるみる熱くなってしまい、肌がマットに直接接触すると火傷をしてしまいます。長袖、長ズボンで運動させたり、マットに水をまいたりしました。

私が初めて音楽室に入ったとき、壁に張り紙がしてありました。前任者の方が書いて張ったものでした。それには、1.ものを食べない 2.ごみをすてない 3.おしゃべりをしないと書かれてありました。それを見たとき、隊員がこれまでに3人も入ってこのレベルなのだろうか、と正直思いました。私は、それを一度ははがしましたが、まもなくまた、掲示しなければなりませんでした。

なぜ、同じことが何度もくりかえされるのだろうか、しかも低レベルなことなのに改善されないのだろうか、としばらく疑問に思っていました。

資料 4. をご覧下さい。私は、子供たちへの教育が定着しないひとつの理由に資料にある数字に原因があるのではないかと思います。この数字から子供たちの中の多くは、きちんと

した家庭教育が行われていない、しかも、虐待を受けていたり、なにか障害を持っていても適切な治療を受けていないことがわかりました。この数字は、臨床心理の先生が行った個別の面接ででてきたものです。学校全体の7割の子供が年齢に合った精神面の正常な成長を遂げていない。これは、本当に、大きな衝撃でした。

資料5にあるように、多くの子供たちは、家庭でいろいろな問題に囲まれて生きています。学校に来るだけでも、音楽室に入ってくるだけでもよしとしなければいけないと、そのとき思いました。音楽の目的も、技術的レベルをあげることよりももっと別のものにしたほうがいいのではないだろうかと思いました。たとえば、音楽療法的な役割を持たせることです。でも、これは私の専門外で困りました。その後の音楽は、音程が多少ずれていても、楽しくたくさんの歌を歌う、簡易楽器を使ってリズムを楽しむ、ことに重点をおきました。

さて、私の活動期間についてお話しします。私たち、現職派遣は3ヶ月の国内訓練を含めて2年間の協力隊活動になります。ですから、実際に任国にいるのは1年9ヶ月となります。この期間すべてを活動に充てられるかというところでもないのです。

資料6をご覧ください。いろいろな事情があって、私が要請どおりの仕事が出来たのはわずか1年1ヶ月なのです。

途上国は日本では考えられない事情が多くあります。エクアドルは私が赴任した翌年初めに大統領選挙があり、国内が乱れていました。長期間によるストライキはそのせいです。教員の給料は安い上に遅配されていました。それも2ヶ月3ヶ月は当たり前でした。30歳の教員の給料は220ドル程度、私たちの現地手当での330ドルをはるかに下回っています。私たちでさえ、きりつめて330ドルで生活するのがやっとで手当を上げてもらえるように頼んでいたのに、家族を養いながら働く教員の給料がこの金額で、しかも、遅配ときています。生活がかかっているのですから、新しい政府に交渉するのは当然と思いました。ただ、政府にもお金がないものだから、なかなか解決できず、ストライキが長期にわたってしまいました。

また、エクアドルは火山国なので、火山の噴火がありました。私の任地にも降灰がありました。私も灰の除去作業を手伝いましたが、本当に大変でした。しかも断水、停電で汚れた体を洗うこともできませんでした。断水や停電は3日ほど続きました。ライフラインの普及にはとても時間がかかりました。一度、ダメージを受けるとそれらを回復させるのに非常に時間がかかってしまうのが途上国の現状です。

教育経営も整備されていないので、何か行事を行うのに、無駄な時間がたくさんありました。行事ひとつ行うのに授業が削られました。ここは、私がとてもストレスを感じた部分です。先にお話したように、私は音楽と体育以外のことでは、口を挟まないようにしていたので、ひたすら我慢でした。

私が、子供たちと向き合って仕事が出来ない時間、トータルで8ヶ月もあったわけですが、これをどう過ごすかが私の任地での大きな課題となりました。

任地に向かう前から、空いた時間は、教材研究の他に、体を鍛えることと、スペイン語の勉強に充てることに決めていました。けれども、それはあくまでも、学校から帰った午後の

時間のことでした。長期間のストライキがあるなんて予想もしませんでした。

任地の近くにエクアドルの首都、キトがあります。この旧市街と呼ばれる植民地時代の地域が世界遺産に指定されていたので、まず、私は、この町のガイドブックを作りました。

また、任地に動物園があったので、スペイン語で書かれた動物の紹介文を訳して「動物園ガイド」を作りました。私の活動とはあまり関係がありませんでした。けれども、エクアドルにきた新隊員には役立ちました。

また、この時間で私は千羽鶴を折りました。帰国前に、千羽鶴を使って平和のメッセージを残そうと思ったからです。子どもたちに千羽鶴を見せる前に、全員に鶴の折り方を指導しました。高学年はこれまでの隊員に少し折り紙を教わっていましたが、低学年は経験がなかったのでかなり苦労しました。でも、きれいな紙で何かを作ることは初めてだったので必死に折っていました。少々形が悪い鶴でも、大事に持って帰る姿を見てうれしくなりました。その後、朝会の時間を少しもらって広島、長崎の原爆の話をしました。千羽鶴を見せながら話をしました。子供たちはとても興味深く私の話を聞いていました。授業中おしゃべりしていた子供も真剣に聞いていました。私の話の後、校長先生が補足をしてくださいました。長期のストライキによって得た時間で意外なことができました。

苦労して余った時間を使ってみましたが、できれば、この時間、もっと自分の活動に役立つ使い方をしてみたかったです。ストライキ中は基本的に自宅待機、任地は小さな村で小さな店が数件あるだけで他にはなにもないので、自分の家の中での過ごし方を工夫しなければなりませんでした。

また、安全上の問題から、任地を自由に離れることができない事情がありました。私たちボランティアは国の代表で来ています。無責任な行動で万が一、事故や事件に巻き込まれては、多くの方々に迷惑がかかってしまいます。ですから、特に理由がない場合は、任地にいることになりました。実際、ストライキ中はあちこちで道路が閉鎖されたり、暴動が起きていたりしました。

学習態度は悪かったけれど、子どもたちは、人なつっこくて、私を「かおり、かおり」と呼んで慕ってくれました。また、私が帰国する時にくれた手紙に、「かおりは、私がちゃんと勉強しないから帰ってしまうのね。ごめんなさい。」なんて書いてありました。

ヒデヨ・ノグチ小学校の職員も日本人のものの考え方や習慣に触れて、意識が少しは変わったことと思います。田舎のあまり刺激のない村に日本人ボランティアが入ったことで、異文化に目を向けるきっかけができたのではないのでしょうか。

今、私は、浦安の小学校で自分の任務に励んでいます。でも、多くの厳しい条件から思いのままにならないながらも教育活動を続けている元同僚のことは忘れずにいます。ヒデヨ・ノグチ小学校の校長先生にたまに電話もしています。音楽室を取り上げられてしまうきっかけになった新校舎の建設はいまだに、資金不足から再開されていません。体育は近所の保護者にボランティアで指導してもらっているけれど、音楽は指導者がいないので授業が行われていないそうです。

帰国した現職教員が途上国の教育の実態を報告して、これからどのように援助活動をして

いったらよいかを考えていくのはとても大切なことだと思います。それぞれの場所に適した人材の配置、必要な資金や教材などの援助をして、より多くの子どもたちが、よりよい教育を受けることができるようになってほしいと願っています。そして、この報告が少しでもそのお役に立てればと思います。

ヒデヨ・ノグチ女子小学校に関する資料

1. 児童数 約 300 人

学年	人数(人)
1年	49
2年	57
3年	50
4年	51
5年	50
6年	43

1, 2年は各学年2クラス、3~6年は1クラス

1, 2年は学級担任制、3~6年は教科担任制。

国語、算数、理科、社会の4教科。音楽、体育は協力隊に頼っていた。

2. 時程

1時間目	7:30 ~ 8:15
2時間目	8:15 ~ 9:00
3時間目	9:00 ~ 9:45
朝食・休憩	9:45 ~ 10:30
4時間目	10:30 ~ 11:00
5時間目	11:00 ~ 11:45
6時間目	11:45 ~ 12:30

3. 日課表

時間 / 曜日	月	火	水	木	金
1時間目	G-6	G-2A		G-5	G-3
2時間目	M-1A	G-2B	G-1B	G-1A	M-1A
3時間目	M-1B		G-4	M-2B	M-2A
4時間目	M-4	M-2B		M-1B	
5時間目	M-6	M-3	M-5		M-3
6時間目		M-5	M-6	M-2A	M-4

G-体育 M-音楽

4. 児童の実態

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
感情未発達	5	13	18	9	9	5
精神障害	12	19	15	13	14	8
言語障害	2					
行動障害	3					
鏡文字		5	14	10	2	
運動障害		7	2	8	2	2
心配性			1	7	1	
臆病さ			2	1		
感情形成完成	26	11	17	15	15	26

単位：人

感情形成完成 30%、精神・感情障害 70%

5. 精神障害・感情障害の原因

家庭内のもめごと

家庭内暴力

身体的、精神的扱いの悪さ

かわいがりすぎ・過保護

放任・愛情不足

6. 活動期間(1年9ヶ月)について

実際の活動期間：約1年1ヶ月

現地語学研修	6週間
夏休み	7週間
クリスマス休暇	11日間
学校行事準備のための休校	2週間
その他の祝日	2週間
火山爆発による休校	6日間
大統領選挙による休校	3日間
ストライキによる休校	51日間

7. 45 分の流れ（音楽）

時間(分)	学習内容
2	・挨拶の歌
10	・出席の確認
1	・めあての確認
20	・歌、リコーダー、鍵盤ハーモニカの練習をする。
10	・次時の予告、次時に学習する歌の歌詞やメロディーをノートに写す
2	・終わりの挨拶の歌

45 分の流れ（体育）

時間(分)	学習内容
1	・挨拶
10	・出席の確認
10	・準備体操
1	・めあての確認
20	・主運動
3	・整理運動と挨拶